

武蔵野台地における人の暮らしと景観のうつりかわり

ー神田川中・上流域を中心にー

Changes in Human Activity and Landscape in the Musashino Upland, Tokyo
: The Upper and Middle Stream Reaches of The Kanda River System

氏 名 中村麻子 (Nakamura, Asako)

指導教員 辻誠一郎 教授

1. はじめに

1.1 研究背景

國木田独歩が珍重した檜林の雑木林と、度々洪水を引き起こしてきた暴れ川・神田川であるが、これらは武蔵野台地を構成する主要な要素である。これらの武蔵野の林や川は、かつて人々にとってどのような存在で、どのように関わり合い暮らしてきたのだろうか。そして人々はこの武蔵野の景観をどのように認識していたのだろうか。

1.2 景観の定義

本研究における「景観」とは、Leser(1984)が示す「地生態系」・「生物生態系」・「人類生態系」の3つの専門領域からなる「景観生態系」のことである。これは視覚対象だけでなく人の五感に関わるものを含む。

1.3 関連の既往研究

武蔵野台地の地形・地質に関しては貝塚爽平(2011)によるところが大きく、武蔵野台地の地形・地質・水に関して網羅されているほか、神田川特有の非対称谷に関しては久保(1988)が論じている。また、直良(1954)が発見した江古田層は日本における寒冷期を実証し植物相研究の端緒となった。

神田川水系流域では多くの遺跡発掘調査が行われ、それに伴う植生復原のための基礎資料も蓄積されている。これらによって集落・住居形態、土地利用、周辺植生と植物利用などが明らかになり、古環境復原を試みている研究も少なくない。自治体による区史・市史では地域における考古学・歴史学を統合した通史的役割が果たされている。

このように当地域に関しては膨大な資料が各専門領域・各地域にあるものの武蔵野台地東半部という広域を対象とし、領域横断的な視点で、約25000年間という長期にわたってのうつりかわりを論じている事例は見られない。

1.4 研究目的

本研究では武蔵野の景観がどのように移り変わり、現在の景観が形成されたのかを景観生態系の観点から解明し、人がどのように環境とのかかわり合いながら暮らしてきたかを明らかにすることを目的とする。

1.5 研究対象

1.5.1 研究地域の概要

関東平野の南西部に位置する武蔵野台地

は青梅市（標高約 180m）付近を扇頂とし、緩傾斜で展開して、台地の東端は標高約 20m の急崖で沖積低地に臨む。その武蔵野台地東半部の入り組んだ谷地に流れているのが神田川で水系である。

1.5.2 対象時代

本研究では、武蔵野台地上の景観変遷を集落や植生の変化だけでなく地形地質や気候変化も含めて研究を行うため、対象時代は旧石器時代・最終氷期最盛期の B.C.23000 年頃から近現代までの約 25000 年間とする。

2. 研究手法

本研究では、地形区分図・地質断面図等の地形・地質学的資料、自然科学分析結果から得られる植生復原のための基礎資料、遺跡分布・絵図・古地図といった考古学・歴史学がもたらした人の居住と土地利用に関する史料、これら 3 つの専門領域に蓄積されたデータを収集し、それらを統合して得られる事実から時期ごとに景観復原を行い景観模式図に描き示す。

3. 景観復原

3.1. 武蔵野台地と神田川水系の地形・地質

3.1.1 武蔵野台地の地形・地質

武蔵野台地は武蔵野礫層の上に火山灰のローム堆積し形成されたもので、形成時期が古い順に多摩面、下末吉面、武蔵野面、立川面とされ、武蔵野面は M1 面、M2 面、M3 面に 3 区分される。本研究で対象とし

ている神田川水系は約 10 万年前に離水し形成された M1 面上に立地している。

分厚いローム層のために、井戸を掘っても水を得づらく、旧石器時代から多くの集落が台地縁辺に立地してきたと言われている。また、ローム層はアルミニウムや鉄を多く含有している土壌のため米や麦の栽培に適さず、根菜類等を主な農産物としてきた。

3.1.2 神田川水系の地形・地質

武蔵野台地東部の標高 50～60m のところには池沼群が南北に分布し、この湧水から流れ出る河川が台地面を侵食して台地を刻むように発達した谷が、神田川とその支流からなる神田川水系である。

3.1.3 江古田層と模式地質断面図

直良（1954）が描いた江古田層に関する地質断面図は当該地域における古環境復原のための貴重な資料である。これと谷の堆積・侵食作用を踏まえて各時代の神田川水系流域における谷地形の模式図を作成した。これにより谷の傾斜は緩やかに、台地と谷底の比高差は大きくなったことが読み取れる。本研究では景観生態系のうつりかわりの観点から以下の 6 時期の景観復原を行う。

- a. 旧石器時代（B.C. 23000 年頃）
- b. 縄文時代中～後期（B.C. 4300～1000 年頃）
- c. 弥生時代～古墳時代（B.C. 300～A.D. 710 年頃）
- d. 古代・中世（710～1590 年頃）
- e. 近世（1590～1868 年頃）
- f. 近代（1868 年以降）

尚、弥生時代頃にほぼ現在の地形になっていたと考えられることから c～f までは同一の模式地質断面図を用いる。

3.2-a. 旧石器時代（B.C. 23000 年頃）

台地上では立川ローム層、谷底では江古田第一泥炭層が形成された時期である。最終氷期最盛期、約 25000 年前の気候は現在の東京よりも寒冷で植生はそれを反映して、台地上ではマツ属（単維管束亜属含む）・トウヒ属が優占し、ツガ属・モミ属・スギ属などが追従する針葉樹林が形成され、台地から谷沿いにかけては、コナラ亜属コナラ節・ブナ属などの落葉樹が生育、低地では湿地部にハンノキ湿地林が生育していた。

人々の暮らしの拠点は台地縁辺部に置かれ、台地崖下の湧水を飲料水とし、その近辺に作業場を形成するなど、地形の特性を生かして狩猟採集中心の暮らしを営んだ。

3.2-b. 縄文時代中～晩期（B.C. 4300～B.C. 1000 年頃）

縄文時代に入り、台地の上には富士黒土層が堆積し谷底には江古田第二泥炭層が形成された。縄文時代中期～後期にかけては気候が温暖になり植生にもそれが反映され、台地から斜面にかけてコナラ節などのナラ類が優占の落葉広葉樹林、林床にはタケ亜科、台地上の開けた場所には草地が広がり、川筋にはトチノキ属が出現、低地にはハンノキ・トネリコ湿地林が見られた。谷底ではヨシ属が多く見られ、カヤツリグサ科・イネ科が追従した。居住地近辺で栽培し始めたと思われるクリ・クヌギ節は、住居構築材・燃料材として使用され、クリは食糧にもされた。当該時期の神田川水系流域各所で台地縁辺の草地に拠点的大集落が形成され、豊富な資源に恵まれ暮らした。がら

3.2-c. 弥生時代～古墳時代（B.C. 1000～710 年頃）

この頃には谷底に江古田第三泥炭層が形成され、台地上の富士黒土層はさらに堆積しほぼ現代の地形に近いものとなった。

当時の植生は、台地上ではコナラ亜属優勢の落葉広葉樹林で、低地周辺の台地や斜面の開けたところには草本類や栽培種が増加、斜面・谷筋にはトチノキなどが生育し、低湿地ではハンノキ湿地林が広がっていた。弥生時代には武蔵野台地にも稲作が伝播し、水田開発のため低湿地のハンノキは伐採され始め、それに代わってイネ科の他、カヤツリグサ科などが増加した。これは、稲作を試みるも失敗し放棄された後に泥炭地化し、雑草が繁茂したためだと思われる。

弥生時代後期頃と古墳時代後期頃には神田川水系流域はいくつもの大集落が存在し、当時の集落内の住居の立地間隔等の集落形態や住居形態も明らかになっている。建築材・燃料材としてクリ・クヌギなどを、居住地近辺から入手していたとされる。

3.2-d. 古代・中世（710～1590 年頃）

古墳時代から大きな地形の変化はない。中世末期頃にかけての小氷期に伴い気候がやや寒冷になり、定着し始めた稲作に影響を及ぼしたと考えられる。

台地上の植生は、コナラ節・クヌギ節を主とした落葉広葉樹林から、次第に植林されたマツ林・スギ林の二次林と草地へ変化し、畑作の栽培種は多様化、低湿地ではヨシ属が激減し、ハンノキ湿地林は部分的に残しつつイネ科・カヤツリグサ科などへ変化した。

3.2-e. 近世（1590～1868 年頃）

地形は古代から大きな変化はしていない。
近世の武蔵野は、人の活動により原始林はほぼ失われ、台地上には植林によるスギ・マツ林、畑、住居（農家）と茅場、草地が増加し、点在、低湿地では水田経営が行われた。クヌギ・コナラなどは減少し貧相な植生となる。近郊農村としての大都市江戸との関係性を保ちつつ中世から続く純農村景観は近代初頭まで続いたとされる。

4. 考察

旧石器時代から中世までの間、景観生態系は変化したのにもかかわらず人々の居住域が水辺近くの台地縁辺であり続けたこと

と、武蔵野が大都市・江戸に対する近郊農村として、中世頃から見られた純農村景観が近代初頭まで保たれていたことは特筆に

3.2-f. 近代（1868 年以降）

近代の武蔵野の景観変化に大きな影響を与えたのは、鉄道の敷設、1923 年（大正 12）の関東大震災（その復興に伴う人口流入と宅地開発）、区画整理、エネルギー革命であり、これらはすべて近代化に由来するものである。それまでの地形・地質・植生とは無関係に開発が行われ、瞬く間に武蔵野の雑木林や川沿いの水田は失われた。

値する。また、近世までは景観生態系の中で資源の循環が成り立っていたと言える。

5. 結論

景観復元を通して 25000 年間の武蔵野台地の人の暮らしと景観のうつりかわりにおける 4 つの画期を設定できた。

1. 縄文時代における自然植生の人為化
2. 古代・中世の森林伐採と水田開発
3. 近世の上水設置による集住域の拡大
4. 近代化による景観の劇的変化

参考文献

- ・ 貝塚爽平(2011):「東京の自然史」改版, 講談社.
- ・ 國木田独歩(1939):「武蔵野」, 岩波書店.
- ・ 久保純子(1988):「早稲田大学周辺の地形-武蔵野台地と神田川の非対称谷に関連して-」.
- ・ 杉並区立郷土博物館(2007): 研究紀要別冊「杉並の地形・地質と水環境のうつりかわり」.
- ・ 鈴木理生(2003):「図説 江戸・東京の川と水辺の事典」, 柏書房.
- ・ 直良信夫(1954):『日本旧石器時代の研究』(早稲田大学考古学研究報告 第2冊), 寧楽書房.
- ・ 横山秀司(1995):「景観生態学」, 古今書院.
- ・ Leser, H(1984):「Zum Ökologie-, Ökosystem- und Ökotypbegriff. Natur und Landschaft」, 59-9, 351~357」.

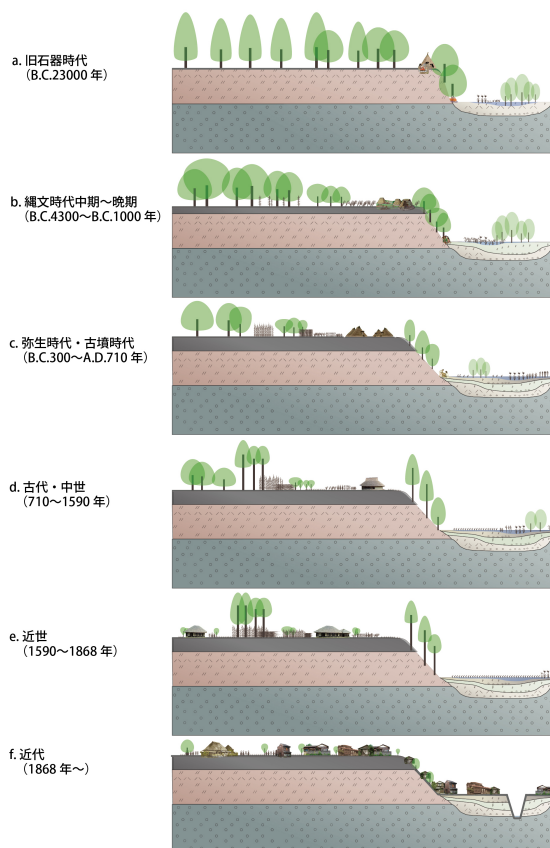


図 1 景観復元模式断面図